

## 大会提言

大会では、テーマを【自然とともに暮らすこども～生きる力を育むには～】とし、こども達の生きる力を育むための自然環境についてや、こども達が自然でいられるために必要な環境について、多様多角的に議論しました。各分科会を通じて得た知見のいくつかについて、ここでは大会提言としてまとめました。

## 提言 1

**「こども達が、自由に感じることや、やってみたいことが許される環境」を大切に、大人は、その環境をつくるためにチャレンジし続けよう。**

## 分科会1 こども達が力を発揮できる環境

こども達が力を発揮する環境をつくる上で重要なのは「伸び伸びとこども達が体験をするにはどのような環境をつくれば良いのか？」を考え、実現していくために、大人がチャレンジし続けることだと思います。安全管理などの視点での「〇〇をしてはいけない」ではなく、どんな環境をつくれば、こども達がやりたいことを実現できるのかを考え、実践する大人が増えていくことで、こども達が、挑戦的な活動をし、自らの力を発揮し、活かしあうことができる環境が増えると信じています。

文責：なおやマン

(分科会1コーディネーター・大会実行委員長)

## 提言 2

**災害時に備え、日常において、こども達がかしこく逞しく、自身の命を守りながら生きていくために必要な環境について考え、準備していこう。**

## 分科会2 こどもと災害

日本における環境を考えた時に、災害を看過することはできません。環太平洋造山帯の上に存在していることから山岳地帯が大部分を占めます。また、ユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピン海プレート、北アメリカプレートと4つのプレートが重なり合う地点に日本が存在しているため、噴火、地震も頻繁に

起こります。さらに台風や豪雨が起これば河川の氾濫や洪水も起ります。その中で私達はこどもと環境についてどう考えていけば良いのでしょうか。まず、第1に命を守ることができる環境を整備することではないでしょうか。災害が頻発する日本ではありますが、どの地域にどのような災害が起こりうるのか、またどのような環境があれば命を守ることが出来るのか。地域の特性に合わせて環境を考えていく必要があるといえます。第2に避難時の判断です。避難という緊急時の行動の仕方が命を守ることは確かなのですが、その避難の仕方やタイミングなどについては更なる議論が必要になるのではないのでしょうか。現在もなお日々多くの災害が日本を襲っています。いつどんな時に大きな災害が襲ってきても想定外ではありません。その時にいつ避難するのか、どのように避難するのか、又はその先の避難生活をどのように過ごすのかという点については、こどもも大人も、災害大国に居住している当事者として議論を重ねていく必要があります。

また、分科会においては、災害時のみではなく、日常においてどのような環境と出会っているのかという点においても3者から発言がなされました。ICT化が急速に進む昨今ではありますが、日常においてこどもが、又は私たち大人がどのような環境と触れ合っているのか、またはどのような環境を用意するのかということについてはより一層の分析と実践の積み重ねが必要であります。未来のこども達がかしこく逞しく、自身の命を守りながら生きていくために必要な環境について更なる熟考が必要なのではないのでしょうか。

文責：千葉直紀

(分科会2コーディネーター・大会副実行委員長・上田女子短期大学)

### 提言 3

#### 自然環境を守り活かしながら、こどもが自然でいられる環境をつくっていきましょう。

##### 分科会3 こどもの学びの環境

##### 「こどもが自然でいられる環境」とは

この分科会では、「こどもが自然でいられる環境」について、長野県の2つの学校を案内していただきながら議論を進めてまいりました。

私達は長野県という自然豊かな地域でこどもを育てています。我が子は幼いときから裸足で畑に行ってはトマトをもいで食べ、じいじばあばと一緒に畑作業もたくさん経験してきました。小学校では「3時間目までは川遊び～」とあって、ランドセルに魚網を持って登校したり、桜が咲く時期は授業中に近くの広場にお花見に行くこともありました。

比較的都会育ちの私としては、このように四季を肌で感じ、自然に触れながら育つ我が子達がとても羨ましいです。農作業やキャンプなどの野外活動をたくさん経験してきたからか、お年頃になっても靴や洋服が汚れるのをあまり気にしません。カエルの匂いや雨の匂い、花の蜜の味も知っていますし、四つ葉のクローバーを探せば数分で両手いっぱい見つけてきます。自然の中で育ったこどもが特別な大人になるわけではありませんが、自然という環境に生まれた「根っここの力」は持っているように感じます。この「根っここの力」(何か未曾有の事態に襲われた時や困難にぶつかった時、あらゆる知恵と他者の力を借りながら、なんとか越えていこうとする力)こそが、これから特に必要な力だと思います。

先の長野県の2つの学校はどちらも自然豊かな環境にあります。裏山や敷地内は整備されたものではなく、自然そのものを活かした遊び場や探索エリア、コミュニティスペースになっています。こどもたちはそのような自然環境に「なぜだろう?」「どうしたらいいんだろう?」と意欲や探求心が掻き立てられ、本来持っている力(考える力や問題解決する力)が引き出され、どんな困難も乗り越えていける力となっているのではないかと感じました。

山や川などの自然から学ぶことと同じように、こどもは家庭や学校などの教育環境における身近な大人との関わりのなかでたくさんのかを学びます。

「こどもが自然でいられる」というのを、「こどもが自然体でいられる」と捉えるならば、自然や周りの環境によって、本来持って生まれた力を引き出し、育み、生かすことが、「その人らしく豊かな心を持って生きていく」ことなのではないでしょうか。

私達大人は、自然環境を守り活かしながら、「こどもが自然でいられる」環境をつくっていくことが大切だと思います。

文責:小林尚美(大会実行委員・佐久市教育委員)

### 提言 4

#### こどもが自然でいられる環境をつくるために、こどもを取り巻く全ての人と共に、社会の仕組みや、企業の取り組みを推進しよう。

##### 分科会4 こどもと健康

こどもの身近にいる親をはじめ、保育者、教師などが知識をもつことが、こどもとゲームの上手な付き合い方や、こどもの安全安心な外遊びを支えることにつながります。そしてそれは、こどもや家庭に関わる人の努力だけで成り立つものではありません。こどもが自然でいられる環境をつくるためには、こどもを取り巻く全ての人と共に、社会の仕組みや、企業の取り組みを推進することも必要です。様々な立場からこどもが育つ環境について、同じテーブルで考え合い、新たな可能性を探していきましょう。

文責:金山美和子

(分科会4 コーディネーター・長野県立大学)